

<前期課題「毎日写真」について>

まず写真と映画の違いについてお話ししましょう。

ふたつとも共通しているところがたくさんありますが、基本的に映画にはワクが設定されています。まず台本があり、それにのっとって舞台装置が組まれ、舞台装置の中に役者さんが配置され、その役者さんの演技を撮影するという形をとります。映画の中の映像は結果から逆算して撮影されたものです。つまり撮影する前に物語の結末はわかっている、それぞれのシーンはクライマックスにつながる形で明確に意味付けされています。

一方、写真は無限に広がる現実じかに向き合います。写真が写せるのは“今”だけです。過去に遡って写すことも未来に飛び越えて写すこともできません。いま写した写真が将来どういう意味を持つのかも誰一人わかりません。

写真を撮っている人なら誰しも経験があると思いますが、「ムダな写真」と撮影直後に思ったコマが、数年後に突然、魅力帯びて見えて来るということは珍しくありません。未来の自分を予測するのはとても難しいものです。それはつまり「数撃ちや当たる」式に、意味不明なものをたくさん撮らなければならないことを意味します。

映画のように結末から効率よく“今”を選び取ることができないがために、この種の馬鹿げた行為を求められるのが写真のひとつの特徴です。

しかし、“今”しか写せないという写真の制約は、写真の最大の魅力でもあります。もちろん映画や絵画のように“過去”や“未来”を擬態することはできます。ですが、そういう写真はあまり魅力的には思えません。

ロラン・バルトの言うように「それが、かつてそこにあった」ということを写真以上に強く示せる表現手段は、他にないような気がします（記録フィルムは写真と同等の力を持っていると思いますが）。古い写真が魅力的な理由は明らかでしょう。写真がもっているこの力を抜きに写真を扱うのは、実にもったいない。

前期は皆さんに、こういう写真の魅力をあますことなく発揮できるスナップショットに取り組んでもらいます。

\*\*\*\*\*

さて、皆さんは自分の日常を、ありきたりのつまらない世界と考えていませんか？

確かに今の日本ではドラマチックな出来事はほとんどありません。カンボジアやユーゴスラビアやルワンダの悲劇を思う時、それに比するドラマを日本は経験していません。しかしそれでも、

数日後には北朝鮮からミサイルが飛んできて、あるいは大地震が来て、東京は廃墟になっているかもしれません。当たり前のように享受しているこの平和は、きわめて危うい均衡のうえに成り立った<特別な日常>とも考えられます。

先の見えない不安定な状況の中で暮らしているのはどの国の人も同じです。そんな不安に向き合い、受け入れ続けていく。それは別の意味でとても劇的なことだと思います。

写真は、そんな得体の知れない“今”にどう向き合ったのかという個人の記録です。

マイペースな人はそういう写真を撮るでしょうし、ひりひりするように生きている人はそういう写真を撮るでしょう。この場合、「撮る」というより「写ってしまう」と言うべきかもしれません。写真においてはこういう計算（自意識）を超えた要素がとても重要で、優れた写真家はみな、それを呼び込む努力をしています。

では「具体的にどうしているのか」となると、それはもう写真の奥義のような話なので、うまく答えられません。ただ、この授業ではその一端を垣間見てもらえるように工夫していくつもりです。

スナップショットでは、通り過ぎる一瞬にすばやく反応することが求められます。その反応にはいろんな種類があってもかまいません。「面白い」とか「奇妙だ」とか「好き」とか「嫌い」とか、「美しい」でも「醜い」でも。意外と重要なのは「見たくない」という感情を撮影に結び付けることだと僕は思っていますが、いずれにせよ明確な感情である必要はありません。何かを感じたらすぐシャッターを押す。意味はあとで考える。過ぎ去ってしまった瞬間は二度と戻りません。

この授業では、毎日フィルム一本撮ってもらいます。「そんなに撮れない」という人が毎年必ずいますが、無理にでも撮ってもらいます。撮り続けることで見えて来るものがあるはずですよ。

日本の古武術とスポーツを関連づけた本に、こんなことが書いてありました。

「千本ノックは非科学的で体を壊すだけという見方があるけれど、必ずしもそうではない。長嶋茂雄は華麗な守備をする選手だったが、それは千本ノックから生まれた。体がふらふらになって、もう動けないという極限状態に追い込まれた時、人はもっとも無駄のない動きを自然に選択する」

一生続けるとは言いませんが、千本ノックのように、ある時期には無理にでも撮ることが大切だと考えています。そうすることで「いい写真を撮ってやろう」という気負いや見栄、あるいは「つまらない写真を撮ったらどうしよう」という恐れなどの余分な力（過剰な自意識）が抜けてなくなり、やがては思考と体が素直に繋がって、自然体で撮影ができるようになるはずですよ。

と言っても、これはスポーツではありません。運動神経とも関係ありません。コンマ何秒を競う世界ではないのです。身の回りの世界に自分がどう反応できるのかという感性の豊かさを身に

つける作業と考えてください。大切なのは世界と関わろうとする意志です。それさえあれば、“今”を選べない不安にも耐えられるはずです。

\*\*\*\*\*

次は「見る（考える）」ことについてお話しします。

自分が撮った写真をどう見るか、それは「撮る」と同じくらい大切なことです。せっかく撮っても、その写真の価値を自分で見つけだすことができなかつたら、撮っていないのと同じです。

生徒の写真を見ていると、ときどき、普通の人が決してシャッターを押さない凄いポイントで撮影した写真が出てきます。「よくこんなところで撮ったなあ」ときくと、「ほんとは画面に小さく写ってるあの人を撮ろうとしたんです」という返事がかえって来たりします。幸運な失敗ですね。でも、それはそれで構わないのです。そのときに「思ったものが写っていない」としてその写真を見過ごしてしまうか、あるいは「面白い」として自分の写真を“発見”できるか、ここが分かれ目になります。

自分の写真を見るのはとても難しいものです。いろんな思い入れが邪魔して、なかなかうまい距離が取れません。たとえば、自分の後ろ姿をイメージする難しさでしょうか。

前期の課題では、4週間の撮影の後、「見る」ための訓練に入ります。具体的には撮影した写真を編集して写真集を作ってもらいます。

まず、他の人が撮った写真を編集してもらいます。500枚以上の中から20〜30枚を選び出して写真集にします。その人の良質な部分をうまく引き出すことを心がけてください。人の写真は客観的に見るができるものです。その距離感を自分のときに応用して、自分の特徴を見つけだす手がかりにしてください。と同時に、他の人が編集してくれた自分の写真集をよーく見ながら、自分がどんな風に見えているのかの参考にしてください。

2人分の写真を編集したあと、いよいよ自分の写真集作りです。

\*\*\*\*\*

みなさんの先輩に「自分の磁場を強く持たないと」と言った人がいます。すごくいい言葉だと思います。是非ここで自分自身の磁場作りに取り組んでください。

(タカノ リュウダイ)